



町田のゼロ・ウェイストを仏テレビが取材

2009年8月2日付の東京新聞にて大きく報じられました

大型生ごみ処理機について説明を受ける
フランス国営放送のスタッフ＝町田市で



フランス国内で放送へ

フランス国営放送のスタッフら四人が町田市を訪れ、官民挙げて進められている同市のごみ減量の取り組みを取材した。フランス国内の深刻なごみ問題を踏まえ、大都市では先駆的な同市の実践などについてリポートするのが狙いで、社会問題などを取り上げる二時間枠で放送されるという。

(堂畑圭吾)

町田のごみ減量取り組み

町田市では市民らの主導で、四十万都市としては先駆的な「ゼロ・ウェイスト運動」を展開している。ゼロ・ウェイストは資源の徹底した再利用を進め、ごみをできるだけ出さない社会を目指す考え方だ。

取材スタッフ一行は同市小山田桜台団地に設置されている大型生ごみ処理機六基の稼働状況を取材。協力世帯の排出ごみ

またスーパー三和小山田店で実施されている全国初のレジ袋ゼロ実験も収録。同店だけで年間約七十万枚、約七割のレジ袋が削減された効果などについて熱心に取材した。

プロデューサーは「フランスのごみ処理は行政の取り組みが遅れている。町田の実践を通じ、国民の意識を高めるのに役立てたい」と話していた。

スタッフら
市内を取材

レジ袋ゼロなど収録

が約40%減量された実績について、市ごみゼロ市民会議の元メンバーらから説明を受けた。同市三輪緑山地域の約五十世帯に市が無償貸与している家庭用生ごみ処理機も見て回った。

前号で速報しましたように、2009年7月28日(火)、フランス国営放送の取材クルーが町田市を訪れ、市内の小山田桜台と三輪緑山におけるゼロ・ウェイストの取り組みを取材しました。今回の取材は来年の春にフランスにて放映が予定されている「世界のごみの未来」という番組のためのもの。世界のごみの未来を予言する場所として、町田が日本の代表選手に選ばれたことはたいへん誇らしいことです。

第73号目次

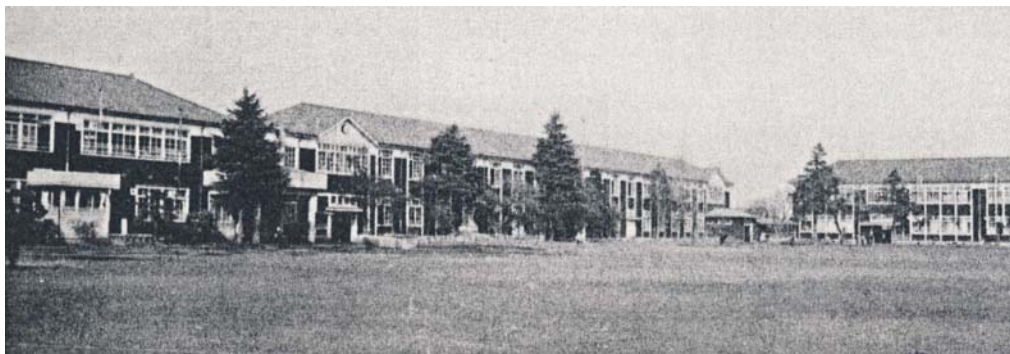
町田のゼロ・ウェイストを仏テレビが取材	1
ふるさとづくり50年・私の幻燈譜(八)	渋谷 謙三 2
生ごみリサイクル交流会 2009——今年も町田から市民や行政関係者が参加しました	5
相原に住む若手アーティストを訪ねて	向谷 有加 6
事務局だより・編集後記	8

渋谷 謙三

市町村行政の中で、一般的に市役所を建て直す、あるいは移転して新築するという仕事ほど判断の難しい仕事は他にそう沢山はないと思われる。その主な理由は、学校や道路整備のような公共的な意味合いがいま一つ弱いし、ほとんどの市民が市役所を建て直すお金がある位なら、その前にやるべき仕事はまだ沢山あるではないか、と思うからだ。もう一つは、市庁舎建設には国や東京都からの補助金は付かないし、建築資金面で特別な財源が無い限り、多額の借金で賄うことになるが、補助事業の場合のような有利な起債(借入金)も簡単には認められないから、長期にわたって市財政を圧迫する恐れが多い。いずれにせよ国の方針も市民の感情も、市役所を建て直す事業に対しては、当然のことながら消極的で冷淡だ。昔からよく、『選挙に落ちたかったら、市長は市役所を立派に建て直せ』と言われてきたこともうなずける。

青山市政の場合も、新しい都市のシンボル、或いは新しい行政推進の実質上の核としての新市庁舎の必要性は認めつつも、敢えて町田町当時の木造2階建ての粗末な建物を中心に、周辺に分散を余儀なくされたまま頑張り続けてきた。当時は、市政誕生後10年で人口は3倍強に増加し、市財政は小中学校々舎等の優先整備に追われる状況で、新しい市庁舎建設を構想する余裕はなかったというのが本当のところかも知れない。

青山市政が3期目に入った頃、市議会や町田一小PTA関係者から市庁舎の移転建設をめぐる話題が出始めた。やせ我慢はこれ位にして新しいシティホールと市政の進展を図ったら?という議会、想いは同じだが恰好な用地探しに手間取る市側、新興住宅街の公立学校が次々に新築される様子に、たまりかねた町田一小PTA幹部の人たちから、約7000坪の学校敷地を分割し、先ずは鉄筋3階建て校舎と体育館、プールも整備し、引き続き市役所を移転新築するという名案?がいつの間にか取りざたされてきた。



改築される以前の町田一小の木造校舎(昭和33年頃:町田ジャーナル社町田教育百年史より)

昭和初期の建物というこの木造2階建て校舎は、見た目には威風堂々と映っていたが、実情は雨漏りがひどい状態で、市長も企画課の私たちも、以前から町一小改築と併せて市庁舎用地を手にする構想を全く考えてもいなかった、と言えばウソになる。

■新市庁舎の完成に至るまでのあらまし

このような気運の中で、青山市長に最終決断を促したのは、「建設資金に三億円を寄付したいというありがたい申し出が相原財産区委員会からもたらされたことだった。

振り返ってみて、私は当時の市庁舎建設事業の担当係長として、市民の抵抗の大きいこの事業の最も難儀な立ち上げ時期を、ほとんど反対らしい反対を受けずに通過できた幸運を思わずにはおれない。しかしそれはまた、一方では単なる幸運ではなく、果物の実が熟して落ちるように、成るべくして自然に時が解決するというものであったと言えないこともない。いま、青山市政の時代を考えると、古い手法と言われるかも知れないが、「人々との信頼関係を築いて、奥ゆかしく座して時宜を待つ」という青山兵法を、図らずも学ばせてもらったのかな？とも思うわけだ。

以下、青山市政の締めくくりとなった市庁舎建設事業の経過を振り返っておこう。

昭和 33 年（1958 年）市制施行。青山藤吉郎氏、町田市長に無競争当選し就任。

36 年 市役所分室を現サルビア図書館敷地に建設。翌年、再び増築。

37 年「町田新市建設 5 ヶ年の施設計画」作成、中に新市庁舎建設事業あり。

39 年 市庁舎建設基金を設け、1000 万円積み立て開始。以後 40、41 年継続。

相原財産区委員会より市長に市庁舎建設資金の寄付申し出（約 3 億円）。

41 年、町田一小 P T A、市長へ校舎の改築要請（町田一小校地総面積約 7000 坪を学校分 4000 坪、市庁舎分 3000 坪に分割する案）。

42 年 12 月議会で庁舎特別委員会設置。同時に庁内にも庁舎建設審議委員会。設計コンペで、設計者に「建築モード研究所」を決定。

43 年 4 月、市議会で、町田市役所の移転先を 3 分の 2 議決。町田一小改築予算案可決。同校舎改築工事着工。

43 年 12 月、建設工事施工者、競争入札で清水建設（株）が落札。



設計コンペで 1 位採用の建築モード作品
町田市庁舎新築工事着工。

44 年 8 月、町田一小校舎建設工事落成。引き続き体育館、プール工事に着手。

以上の経過で始まった町田市初の大事業である新市庁舎建設事業は、多くの市民と市政関係者の夢を乗せて昭和 43 年 12 月末に着手し、翌昭和 44 年の 12 月末の僅か 1 年間の工期を厳守して完成した。時に青山市長の任期は、残り僅か 2 ヶ月となっていた。

完成した市庁舎の概要は、敷地面積約 10000 m²、建物面積、鉄筋コンクリート造地下 1 階地上 6 階建て延約 13000 m²、総事業費は約 8 億 5000 万円（調度品を含む）で、目標人口は 30 万人、収容能力は 1500 人であった。

■新市庁舎建設にまつわるあれこれ

さて、形式的な経過の話はこれくらいにして、担当者として取り組んだ市庁舎建設にまつわる内輪話を、今後の参考までに少しご披露しておこう。

★まちがいを犯さない

企画部企画課が市庁舎建設事業を担当するに際して先ず抱いた最大の関心事は、町田市政始まって以来のこの大事業で、最後まで「間違い」を決して犯してはならない、特に、工事関係企業との間に寸分の油断も隙も許さない方針で臨むことにあった。これは坂本企画課長の最初から



現庁舎（完成当時は9階まで増築が可能な構造だった）

の方針で、私たちは市長から市議会特別委員会に対して特段の自粛申し入れをしてもらった。当時はまだ、議員から業者紹介が平気で行われていた頃で、この異例の申し入れは大変な効果をもたらした。同時に指名競争入札を準備する庁内の審議委員会に対しても綱紀の緩みの戒めを図った。

★分りやすく親切で、働きやすい庁舎

積極的な関心事の第一は、言うまでも無く、どこの庁舎よりも市民にとって判りやすく親切な、職員にとって働きやすい明るい市庁舎を建てることであった。具体的に言えば、判りやすく親切な庁舎の象徴は、総合窓口課の新設だった。これは市役所の特殊な仕事の部門を除いて、1階の総合窓口課で各種の窓口サービスを受けられるように統合し、2階以上は出来るだけ市民が歩かないで済むようにする。その代わりに職員が歩く分を書類だけが独り歩きできる各階と1階を結ぶエア・シューターや平面でのベルトコンベアを設置して、サービスの向上と事務処理の効率化を図ることにした。また、市民をタライまわしせず、歩かせないという理念を更に拡大して、各支所との通信システム網整備によるサービスも考えた。やや高価だったが、ファックス通信網を本庁・各支所間を結び各種の証明書の一部発行を実験的（法的な整備が追いつかず）に開始した。

★新市庁舎を誰よりも早く市民に公開する

1970年2月1日の市制施行12年目の記念日に、新しい市庁舎の落成記念式典が、市議会議員を始め内外の800名の招待者の出席を得て、6階の臨時式場で盛大に行なわれた。しかし何よりも特筆したいことは、その1週間前の日曜日の1月25日、18万全市民に呼びかけて、職員総出で案内するお披露目のための市民公開を行なったことだ。当日は、市内各地域から10000人を超える市民の人たちが見学に訪れ、大変に喜んでいただいた光景は、なお記憶に新しい。私たちは、関係者みんなで精魂を込めて造り上げた市庁舎を、先ず誰よりも早く市民の人たちに見て欲しかったのだ。（次号へ続く）

生ごみリサイクル交流会 2009 —今年も町田から市民や行政関係者が参加しました

2009年8月24日の日曜日、早稲田大学国際会議場において、第17回となる生ごみリサイクル交流会 2009がおこなわれ、年に一度のこのイベントに、全国から500人近い関係者が集まりました。今年度は都会の生ごみについて各地の事例報告から考える新しい分科会がお目見えし、盛況でした。今年のこの交流会には、町田市からも市民だけでなく公園緑地課の職員と小山田の苗圃の関係者が参加しました。

都会の生ごみ分科会で三つの事例報告

午前中の全体会に引き続き、お昼をはさんでの午後の分科会は四つにわかれておこなわれ、第四分科会「都会の生ごみどう

する？…ここまでたどりついた」では、当市民会議の事務局長である渋谷謙三氏がコーディネーターを務め、NPO 緑の会の事務局長である恒川敏江氏がアドバイザーの任にあたりました。事例報告は全部で三つ。町としてゼロ・ウェイストを急速に推進し、全国の注目が集まりつつある神奈川県葉山町からは、環境課係長の雨宮健治氏と葉山一色台自治会の松本信夫氏が、莫大な人口を擁する政令指定都市の川崎市からは、家庭生ごみの地域循環ルートを地道に開拓し続ける川崎・ごみを考える市民連絡会の飯田和子氏が、家庭生ごみと花の苗とを交換するフラワーセンター事業で勢いに乗る埼玉県戸田市からは、環境クリーン室クリーン推進担当副主幹の吉田美枝氏が、それぞれ登壇しました。



バクテリア de キューロが会場に登壇

報告のトップバッターは葉山町。町民一人当たりのごみ処理費(平成18年度)が約3万円と、神奈川県を大きく超えていた葉山では、ごみ処理広域化からの脱退を2008年1月に当選した現在の町長が表明。「広域に逃げ込みたかったのが本音」と冗談まじりに語る雨宮係長。だが、ゼロ・ウェイストでいくと腹をくくり、職員と住民の試行錯誤から画期的なアイデアが



パワーポイントでキューロを解説する松本氏

うまれつつあります。本業はパイロットという葉山一色台自治会の松本氏は、自宅の庭で無理なく簡単に生ごみを自家処理できるバクテリア de キューロを会場に運び込んで説明。休憩時間には多くのひとが実物に触れてその仕組みに見入るほどの人気でした。

苦悩の川崎、勢いに乗る戸田

つづいては飯田氏が、地域の農家の方と独自に契約し、地域循環の三つのルートができている川崎の事例を紹介しました。都市農業と地域住民とのつながりを考えるうえで大切な取り組みである一方、その広がり「速度の鈍さ」に飯田氏はせつなさを率直に述べる場面もありました。最後の報告は戸田市。「ごみがどうやったらお金になるかを説いてまわっている」と語る吉田氏は、職員とは思えないほどのパワフルな話術で会場を圧倒。EMぼかしをふりかけた密閉バケツ(19リットル)で家庭生ごみを持ち込んでもらうかわりに花の苗24鉢をプレゼントするフラワーセンター戸田の試みは、花とみどりのまちづくりと家庭生ごみの堆肥化とが連関していない町田市にとって、たいへん参考となる事例でした。



戸田市の吉田氏

都市の生ごみ堆肥化を大きな環に

「都市化の波にさらされつつあるまちがどうやって生ごみを地域に有効にかえしていくか」という渋谷コーディネーターの問題提起で始まった今回の分科会。恒川アドバイザーからも、「行政が真剣に取り組んでいる。時代は変わった」こと、それぞれの地域に合ったいろいろな堆肥化の方法を考えていく必要が指摘されました。役所が家庭から集めているいろいろやっていた時代から市民の大きな力がかかってくるようになってきた今、この動きを「なんとか大きな環にしていきたい」。そのようなコーディネーターの総括の言葉を受けて、100名以上が参加した分科会は大きな拍手とともに幕を閉じました(取材：編集部)。

相原に住む若手アーティストを訪ねて ——家具インテリアのデザイン、制作にたずさわる三宅直子さん

向谷 有加



左が三宅直子さん。右の作品は竹を華道家の小日向庸三さんが、器を三宅さんが手がけた。

筆者は編集部として先月号で相原の美大生の活動を取り上げました。今回は相原の個人アトリエで家具、インテリアのデザイン制作にたずさわる三宅直子さんをご紹介します。

三宅さんとは堺市民センター祭りでお会いしました。春日古流の主催するお茶席で、竹と陶器を組み合わせた作品が目にとまり、写真撮影の許可をお願いしたときに作者として紹介していただいたのが三宅さんでした。先月号まで相原の美大生たち取材していた筆者は、美大を出た後も引き続き相原を拠点として活動する若い人がどんな目で相原を見ているのか知りたくなり、後日三宅さんに取材をさせていただきました。

進学をきっかけに上京、相原の自然の豊富さに惹かれて居を定める

先月号で紹介した相原在住の現役美大生たちと同じく、三宅さんも東京都町田市以外の出身です。大阪の自然豊かな場所で育ち、大阪芸芸大を出て京都の工房で一年ほど講師として働いたあと、多摩美術大学大学院の修士課程に進学し、この地域に縁ができました。

「音を出せて、土を練っても大丈夫な工房をずっと探していました」。大学院を終える前から自分の制作をするためのアトリエを探していたところ、相原駅周辺にあるいっふう変ったアパートを見つけます。三宅さんは一目ぼれだったといいます。人気のあるアパートで少し時間がかかりましたが、大家さんのご厚意でアトリエ付きでほどなく入居ができませんでした。現在住み始めて二年ほど。ここでの暮らしも制作も快適だとのこと。

「散歩していて制作上のインスピレーションをもらうことが多いので、この自然環境が最適なのです。…今は他に移ることは考えられませんね。腰を降ろしてしまいましたから」

昨年いっぱいまでものづくりの会社で職人として働いていた三宅さんは、今年から独立し、仕事環境ががらっと変わりました。

フリーのアーティストとなって、意識し始めた「住んでいる町」

職人として会社勤めをしていた頃は、自然に囲まれた環境に満足を感じつつも、相原は「寝に帰る場所、そして自分のアトリエがある」という思い入れしかなかったそうです。しかし独立以降、フリーのアーティストとして究極の職住隣接、24時間を相原で過ごすようになり、三宅さんは自然と自分のよりどころについて考えるようになります。そのときに強く相原と相原の人たちを意識したそうです。

自分の仕事——より正確には自分のしていることをこの地元のひとに知ってもらいたい、つながりたい、という思いが独立してほどなく自然に芽生えてきた。この意識の変化は所属する組織から独立したこともあるでしょう、と三宅さんは説明します。

それとともに自分の育った場所にとっても近い場所に戻ってきたという感慨も三宅さんのなかにあったのではないかと筆者は推察します。「自分の住んでいる田舎がかつては嫌いで都会へ都会へ、と出ていたはずなのに気づけば相原に落ち着いてしまって。見慣れた風景に戻ってきていたんですよ」と取材中、学生時代から今までの移動生活をそんな言葉で振り返ったのが印象に残りました。

フリーの仕事を軌道に乗せながら、相原の人にどんなアプローチをしたら自分のことを知ってもらえるかな、とそんなことを漠然と考えながら仕事していた折、アパートの大家さんがふらりと現れたそうです。

今年の5月「お茶の器を頼まれてほしいから、これからお茶会へ行こう」と作業着のまま三宅さんは大家さんに突然お茶の席に連れ出されました。作業着のままお茶席なんて、と気後れを感じた三宅さんでしたが、大家さんはごくごく自然に三宅さんを春日古流の方々を紹介しました。そして三宅さんは器の依頼

をきっかけに、紹介された春日古流でお茶を習うことになります。

三宅さんはお茶を習い始めたことで地元のひととの関係に広がりができ、とくに仕事面では同年代の華道家、小日向庸三さんと知り合い、小日向さんの活動の幅広さに自身の制作意欲も刺激されたといえます。

「ものを作ること」と「ものの由来」をより身近に、相原の人に伝えたい

そして今年の7月、三宅さんは春日古流の生徒として、また相原在住のアーティストとして堺市民センター祭りに参加しました。筆者がそこで三宅さんと出会ったのは先述のとおりです。取材時に、改めてお祭りの感想をうかがったところ嬉しそうに「体があつたまりました」と答えてくれました。ものづくりは基本的にひとりの作業ですが、三宅さんは共同作業や、人とのやりとりに反応して作品が出来上がる過程が好きとのこと。お祭りでその楽しさを久しぶりに味わえたといえます。

お祭りに参加し、相原に住む人たちの顔を知ることができたことで、「ものづくり」の楽しさを相原のひとに伝えたい、という思いがかたまりつつあることも話してくれました。その方法のひとつに「オープンアトリエ」をいずれ開けたら、というアイデアが芽生えていることも少し教えていただきました。そのときは陶芸教室といったスタイルではなく「作りたいものをこちらに伝えていただいて、それを作る方法などを一緒に考えながら作る場所も提供できる」形をとりたいとのこと。このアイデアは「ものを作る」「ものの由来を知る」楽しさをシンプルに味わって欲しいという思いから出てきたそうです。

「小さい器などでもいいので、自分の手で自分の使うものを作る楽しさと、ものの由来を知る喜びを知ってもらえたら。…ご飯を食べる器とか、そういうものに対して私たちはどこまで知っているのかな、という思いがあつて。毎日ふれる椅子とかテーブルとかでさえ、どうやって誰が作っているとか、たぶん知らない人もたくさんいると思うんですよ、大量生産品がほとんどだから。だからこそ手で何かを作れるっていうことがもっと身近に感じられたらな、と思います。…いま、食品にたいしてはとくに敏感になっていますよね。産地、栄養、薬のこと、作っている人の顔。ただ、ものに対してはどこから来てどこに行くのか、あまり知らない人、多いんじゃないかなと思って。」私が知らないから気になるんだと思うんですけど、と言葉を選びながら三宅さんは続けます。

「ものを作る」「ものの由来を知る」喜びを、少しでもいいので相原の人に知ってもらえることができればうれしいです。特に近所に幼稚園もあるし、そんな小さい子にも遊びの中で知ってもらえたら、ということも考えてしまいます」と今後の相原での活動のイメージを語っていただきました。

終わりに——相原の自然に惹きつけられたアーティストの日常にお邪魔して

今回の取材には三宅さんの自宅とそのアトリエを直接訪ねました。お茶請けに出していただいた器は三宅さんの手によるもの。「自分で使うものは、ついどっしりしたものを作ってしまうんです、趣味が出てしまって。」依頼されたものにこんな重いものは作れないんですけど、使い勝手は良くないですから、とはにかみながら話す三宅さん。そのお皿は厚みがあり素朴。食べること、お茶を飲むことを引き立たせてくれる優しい土の色が活かされていました。自分が使うものを作るって生活を愛しく感じさせますね、と同年代の気安さで軽口をたたき筆者に三宅さんは「そうなんですよう、そういう気持ちで、自分がものを作るときの根っこにもあるかも」とうなずいてくれました。

相原の自然環境に魅力を感じて住まいと職場をここに定めている三宅さん。相原で暮らすことを意識したときに彼女は相原の人びとに自分が携わるものづくりの魅力を伝えたいと考えるようになりました。そんな思いをすくいとってくれる地域の人があつて、自然に地域とつながるきっかけを作る人間関係が存在する相原。美大が近接する土地柄と、自然に恵まれた地の利を活かした新しい相原の魅力が形成されつつあるようです。



事務局だより

定例会のおしらせ

- ・9月の定例会は9月2日(水曜日)です。
中央公民館 学習室(3) 18:00～
- ・10月の定例会は10月7日(水曜日)です。
中央公民館 学習室(3) 18:00～

——会計担当からのお願い——

今年度の会費が未納の方は、下記にお振込みを
どうぞよろしくお願いいたします。

口座：「ゆうちょ銀行」 10160 - 67915431

名義：町田まちづくり市民会議

真光寺のリサイクル広場がいよいよオープン

2009年夏、三輪緑山町内会の夏祭りなどではリユース食器やリサイクル食器を使ったエコステーションが設置され、NPO法人町田発・ゼロ・ウェイストの会の協力のもと、地域住民のみなさんによる運営がおこなわれました。このように市内の大きささまざまなイベントで、ごみを出さないお祭りを目指すエコステーションの導入が急速に進みつつあります。

そうした動きとともに、9月6日(日)には鶴川の真光寺にて、町内の住民が自主的に運営するタイプとしては市内初のリサイクル広場・真光寺がいよいよオープンします。このリサイクル広場は、EM 窪平代表である仲村達郎氏らが町内会と長期間にわたって交渉を続けてきた結果、ようやく実現に至ったものです。行政からは計量のためのはかりと持ち込まれた品目を収納するための回収かごを借りる以外は、経費も人員も頼らず、資源回収によって得られたお金だけで維持をおこなっていかうという目標が掲げられています。まさに地域住民の自治によって可能となるリサイクル広場の実験がスタートすることになります。このリサイクル広場・真光寺は、真光寺3丁目会館に隣接する広場で毎週日曜日10時から14時のあいだ、開設されるとのことです。

編集後記

今月号は巻頭にてフランス国営放送による町田市でのゼロ・ウェイストの取り組みへの取材の様様を、東京新聞の記事の転載というかたちでご紹介しました。記事の転載を許可くださいました東京新聞の関係者のみなさまに心から感謝を申し上げます。この取材の様様については、8月6日(木)付のタウンニュースでも、三輪緑山での取材風景の写真とともに「町田のゼロ・ウェイスト活動 フランスマスコミが取材」というタイトルで記事が掲載されました。こちらをあわせてご覧ください。



今号では生ごみリサイクル交流会 2009の取材もおこないました。記事でも触れたように、葉山町、川崎市、戸田市、どこの市町村の取り組みも町田市にとって興味深いものです。なによりも驚いたのが、葉山や戸田でごみ減量に取り組んでいる職員のパワフルさと柔軟さ。この点こそ、町田の行政がもっとも見習うべきことなのかもしれないと、ふと思いました。なお、町田でもおなじみ、ゼロ・ウェイストアカデミー元事務局長の松岡夏子さんも、葉山町の職員として分科会会場で葉山の報告を陰ながらサポートされていました(H. I.)。

まちづくりの環

町田まちづくり市民会議会報

2009年9月2日第73号発行

発行者 佐藤東洋士

編集責任者 井上弘貴

事務局 常盤町桜美林大学内

TEL 042-797-6947

E-mail hiro_inouye@yahoo.co.jp